



森林総合監理士 先進地視察研修に参加して

盛岡森林管理署 松尾 亨
現・計画課 松浦 博文



清万採種園の林内

2月21日から3泊4日の行程で、平成25年度森林総合監理士資格取得者（盛岡署：松尾亨 現・計画課：松浦博文）による森林林業先進地視察を行ったので、その概要について紹介します。

今回の視察は、森林総合監理士とし

てのスキルアップを目的に、自らが視察先を選定し、視察先への依頼や管轄局署との調整、現地までの交通手段等の計画を立て、冬の信州へと向かいました。

初日は、昼過ぎに佐久市佐久平駅に到着。東信森林管理署の送迎により浅間山の麓にある清万採種園へ。園の入口には懐かしの名機CT-35トラクタが待ち構えており、夢中で写真撮影をしていると、軽井沢森林事務所首席森林官から園の説明が始まりました。昭和35～37年にかけて長野県内及び群馬、新潟、福島、栃木、山梨、岐阜の各県より精英樹クローンが集められ、約45haの事業採種園として設定されたのが始まりで、その後、山火事や園の見直し等により現在は約5.7haに規模を縮小。苗木の需要減少から約30年間はほとんど整備がされていないかつた

ものの、近年の急激なカラマツ苗木の需要増加により平成27年から再整備を開始したとのこと。園内は着果を促すために環状剥皮が施されたカラマツが均等に配置され、球果を採種するための高所作業車進入のスペースも確保されていたほか、近年はドローンによる着果調査も行われているとのことでした。

つぎに、日本最古のカラマツ人工林と言われている「浅間山カラマツ植物群落保護林」へ向かいました。嘉永3年（千八百五十年）頃に小諸藩が山引き（山取苗）のカラマツ苗木を植栽したと伝えられ、我が国で最も古いカラマツ造林地として学術的にも貴重なことから保護林に設定、面積は約1.5ha



東信木材センターでの説明

とやや小さいものの、亀甲状の樹皮に覆われた通直・完満で壮大なカラマツ林に目を奪われました。

その後、天然アカマツの群生林である「浅間山霧上の松植物群落保護林」を視察し、続いて、東信森林管理署の配慮により「絶対に見るべき」という

東信木材センターへ。近年、急激に業績を伸ばしている当センターは、敷地面積が約七千坪と決して広いとはいえない貯木場ですが、取扱量が約15万立方で売上高は約17億1千万円。いくつかの疑問に当センターの小相沢専務がパワーポイントを使って説明してくれました。

まずは、「信州カラマツはヤング係数も高く、震災復興用資材の需要も増まって、『とにかく売れる』とのこと。さらに、『当センターでは一目選木という1cm刻みの仕分けをすることによって、買い手が自社工場で仕分ける手間を省くことができるメリットがある』。また、『輸送トラックの帰り荷として、空荷で戻るより、当センターに寄ってもらえればいつでも荷（木材）がある。この手法で安い単価による運材を行う



ソヤノウッドパークに山積みされたアカマツ

ている」。そして、『このような仕事ができるのも、安定的に供給をいただいている国有林の安定供給システム販売のおかげだ』と感謝の気持ちを述べられていました。

その後、当センターを後にした私たちは、東信森林管理署へ向かい、次長から管内概要等の説明を受け1日目が終了。

2日目は、電車を乗り継ぎ塩尻市の「ソヤノウッドパーク」へ。約三万一千七百坪の広大な敷地に真新しい施設（平成26完成）が建ち並び、貯木場にはアカマツが山のように積みまわっていました。

ここでは、長野県、塩尻市、征矢野建材株式会社、大学など、産学官連携による「信州H・POWERプロジェクト」が立ち上げられ、年間約10万立方の原木消費を目標に事業に取り組んでいるとのこと。しかし、現在の取扱量は三分の一にも満たない約3万立方／年と製材品の売払いに苦戦を強いられています。

3日目は、木曽森林管理署において署長ほか担当職員から管内概要等の説明を受けました。

平成28年度の収穫量は七万八千八百立方、素材生産量は約六万一千三百三十



架線集材のために張り巡らせたワイヤー

立方、収入額が約16億円と、桁違いの収入額に驚愕しました。同時に木曽ヒノキの販売単価の高さにも驚かされました。その後、架線集材作業を行っている生産請負現場へ向かいました。当日はあいにくの天候で作業は休止。木曽地方では、ほとんどの事業体が降雨時の作業は危険という理由から休止するとのこと。昔ながらのしきたりを守っているそうです。視察した作業現場は2カ所。いずれも架線集材を行っており、索張り方式はインドレスタイラー式（スパン350m）とダブルエンドレス式（スパン527m）。向柱に取り付けられたガイドブロックや張り巡らされたワイヤーを目にし、脳裏に懐かしい光景が蘇りました。



ボードウィン蒸気機関車

現地に居合わせた事業体担当者からは「木曽谷のような急傾斜地では架線集材は必須。架設に時間を要するものの、張り上げ後は集材も容易なため、今後も架線集材を続ける」旨のお話を聞くことができました。

その後、木曽悠久の森「赤沢自然休

養林」へ。冬期閉鎖中であつたものの、木曽森林管理署のご配慮により「森林鉄道記念館」を見学。ボードウィン蒸気機関車やC4型ディーゼル機関車など、写真や映像でしか見たことのない機関車を目にすることができました。

次に新上松土場へ。約八千四百坪の貯木場にはベニガラで品等格付けされたヒノキやサワラが所狭しと並んでいました。この土場では、中部局森林整備部企画官（駐在）から、取扱い樹種、販売方法、樹種別の販売単価などの説明を受けたほか、伊勢神宮への納材について貴重なお話を聞くこともできました。

午後からは、「御料館」（旧帝室林野局木曽支局庁舎）と「木曽山林資料館」へ。管理人の古畑さんから両館の案内と説明を受けました。「御料館」は、御料林を管理するために明治36年「宮内庁御料局木曽支庁」として建てられたものの、昭和2年の大火により焼失。わずか6ヶ月で旧庁舎を模した現在の庁舎が再建され、当時の皇室の威風凛々かがい知ることができました。また、「木曽山林資料館」は、所蔵している林業教育にかかわる資料と資料館前に広がる演習林が「林業遺産」に認定されており、管内には、入庁当時（昭和60年代）に使用していた懐かしい調査器具や見たことも無いような機械器具、また、数千冊に及ぶ書籍などが展示されていました。

無事にこの日ですべての行程を終え、翌朝、木曽福島駅から帰路につき

今回の先進地視察研修を終えて感じたことは、まだまだ自分達が「井の中の蛙」であり、もっとスキルアップをしなければならぬということ。そして、もっと他局のことや、森林林業に係る国内全体の流れなどに目



三分の二サイズの御神木奉曳車

を向ける必要があることも考えさせられました。今回の視察研修の中で、木曽森林管理署長から「このように他局の事を学ぶことは大変いいことだと思つ。今度は、こちらから東北局への視察研修なども考えていきたい」とのお話もありました。これを契機に、森林総合監理士の知見を深めるひとつとして、森林管理局間での視察交流が広がってほしいものです。

最後に、この度の視察研修に際しては本局より多大なご配慮をいただきました。この場をお借りして感謝申し上げますとともに、期待に添えるようフォロー活動に邁進してまいります。